# 活動完了報告

## 点字プログラムや字幕を活用した、よりインクルーシブなコンサート体験を

コロンえりか

**≪報告および成果≫**

【バッハ・コレギウム・ジャパン　第九コンサート】

① 2021 年 12 月 21 日/東京芸術劇場　点字プログラムと手話通訳

【コロンえりか　ソプラノリサイタル】

② 2022 年 3 月 16 日/大阪真ルミエールホール　字幕・点字プログラム

③ 2022 年 3 月 17 日/大阪真ルミエールホール　字幕・点字プログラム

【ぼくらはみんな歌うたい　ホワイトハンドコーラス特別コンサート】※

④ 2022 年 3 月 25 日/京都コンサートホール　字幕・点字プログラム・手話通訳

※コロナ感染対策のため 9 月 23 日にスケジュール変更

4 公演で 10 部ずつ合計 50 部点字プログラムを手配した。コンサート会場では、手話通訳者の配置を行い、情報保障を 90 名以上の障害当事者に提供することができた。歌詞の字幕を映写することにより、聴者・聴覚障害者関係なく、より深く内容を感じ取ってもらうことができた。
来場者は、①約 1200 人②900 人③900 席人④510 人(満席)であり、3500 人の観客、出演者、スタッフを入れると延べ 3700 人へのリーチを実現した。
インクルーシブな対応を行ったことで、初めてコンサートにいらっしゃったお客様や、④で無料招待した特別支援学校の生徒たちや教育関係者からも高い評価を得た。
加えて、国会議員、市議会議員をはじめ、障害や年代を超えた「社会包摂」の課題に取り組む各方面の専門家とつながりをもつことができた。

**≪今後の課題≫**

今後、コンサートをインクルーシブな場にしていくためには、あらゆる個別のケースに柔軟に対応するスキルと体制が必要である。対応の中には、ある集団にとって、そして全体にとっても益になる場合と、受益が相容れない矛盾を抱える場合がある。
例えば、コンサートを楽しんでもらう為に、点字プログラムを墨字プログラムと併用して配布することはどちらにとっても良いことである。(ただ、弱視で点字が読めない方が少なからずいることにも配慮しなければならない。)
また、字幕映写することは聴者、聴覚障碍者どちらにとっても益となる。(特に外国語の歌唱の際は同時翻訳の意味合いも兼ねるので内容がわかりやすく、外国の観客が多い場合は、英語も表記するなど配慮すればよい。)
一方、室内楽の際に音のイメージを伝える映像や、視覚・聴覚情報を補うためには高い芸術センスを持ち合わせてお互いを邪魔しない演出を考えなければならず、今回の制作のプロセスには熟考を重ねる必要があった。また、多動や発語が多い子どもたちを招待する時は、音に集中したい観客との間に摩擦が生じないようなプログラム選びや演出、

進行も工夫が必要であった。今回どの公演でも高評価を頂いたが、毎回公演の準備に相当の知見とエネルギーが必要であると感じている。
「インクルーシブなコンサートを実現することで達成される喜びや、意識改革への波及をどのように進め、多くの現場で活かしていけるようにするか」ということが今後の大きな課題である。